

報告事項カ

平成26年度鳥取県立学校第三者評価の結果について

平成26年度鳥取県立学校第三者評価の実施結果について、別紙のとおり報告します。

平成27年3月16日

鳥取県教育委員会教育長 山本 仁志

平成26年度鳥取県立学校第三者評価の結果について

平成27年3月16日
高等学校課
特別支援教育課

1 概要

平成22年度から、各年度毎に県立学校8校（高等学校6、特別支援学校2）ずつ実施しており、平成26年度から2巡目の実施となった。

2 実施状況

年度	H20 (試行)	H21 (試行)	H22	H23	H24	H25	H26
学校名	倉吉東 境港総合技 術 鳥取盲	八頭 米子 倉吉養護	鳥取東 智頭農林 倉吉西 倉吉総合産 業 境 日野 鳥取養護 皆生養護	鳥取西 鳥取商業 鳥取中央育 英 米子東 米子工業 米子白鳳 鳥取ひまわ り 白兔養護	鳥取工業 鳥取湖陵 岩美 倉吉農業 米子西 米子南 鳥取聾 県立米子養 護	鳥取緑風 青谷 八頭 倉吉東 米子 境港総合技 術 鳥取盲 倉吉養護	鳥取東 智頭農林 倉吉西 倉吉総合産 業 境 日野 鳥取養護 皆生養護
実施 校数	3校	3校	8校	8校 (内分校1校)	8校	8校	8校

3 評価の実施体制

委員数	評価委員24人
評価チーム数	8チーム
1評価チームの評価校数	1校
評価チームの編成	評価委員3名

4 平成26年度の経過

期 日	内 容
H26 4月11日 8月21日	評価対象校の決定 第1回第三者評価委員会 ・本年度の第三者評価の計画及び方法 ・第三者評価の評価項目及び評価基準 ・評価対象校の概要と学校自己評価及び学校関係者評価の現状 ・第三者評価に係る研修 ・評価チームの編成、担当校の決定 ・改善計画の進捗状況について
9月～11月	各評価対象校2回（2日間）の学校訪問を実施
H27 2月20日	第2回第三者評価委員会 ・評価の決定
3月16日	評価書の交付 … 別添資料
3月31日	評価対象校による改善計画書の提出

<参考>

平成26年度鳥取県立学校第三者評価委員会委員名簿（敬称略）

【評価委員】（○印委員長）

氏名	役職等	備考
○秦野 諭示	鳥取環境大学情報システム学科教授 学科長	
岡野 幸夫	鳥取短期大学国際文化交流学科准教授	
齋藤 邦康	齋藤邦康税理士事務所長	
岩垣 和久	元倉吉西中学校長	
川口有美子	鳥取環境大学 環境学部環境学科 講師	
福井 利明	株式会社エナテクス代表取締役	
山下 敬史	前鳥取市立湖東中学校長	新規
高田 節子	元鳥取市立醇風小学校長	新規
森木るり子	元鳥取城北高校PTA役員	新規
吉岡きよ乃	株式会社グッドヒル役員	新規
中島 弘子	元鳥取県警 元東部少年サポートセンター少年相談係長	新規
朝倉 香織	とっとりパーソナルサポートセンター長	新規
水野 由久	水野商事株式会社 取締役営業部長	新規
秦野 みほ	有限会社千疋屋 企画室室長	新規
古塚 秀夫	鳥取大学 大学教育支援機構 入学センター長	新規
大野 賢一	鳥取大学評価室	新規
山田 恭子	医療法人財団共済会清水病院栄養管理室管理栄養士	新規
小椋 照良	元東伯中学校長	新規
岸本 拓治	YMCA 米子医療福祉専門学校長	新規
山田日出子	学校法人米子自動車学校 経理係長	新規
松本 靖史	元義方小学校長	新規
大森 克美	STUDIO-E 理事長就労継続支援B型事業所	
大江佐代子	元日進小学校教頭	新規
橋目 潤也	株式会社 ツーウェイシステム鳥取プロスペリティセンター事務局長	新規

平成 26 年度 鳥取東高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

鳥取東高校は、普通科と理数科を併せ持つ進学校として、「21世紀の鳥取、そして、日本を支える人材の育成」を目指し、学校長のリーダーシップのもと、教職員が連携して教育活動にあたっている。その基本的な考え方は「しのめプロジェクト」として体系的にまとめられ、教育実践に移されている。特に地元社会との関係を重視した「地域の社会を支える人材」の育成は、「民」の力を重視する建学の精神と地元に多大な貢献をしてきた多くの同校出身者の思いに支えられながら、これからますます重要になってくる地方振興の担い手づくりとして期待される。

指導にあたる教職員の教育課題に対する認識と意識の高さ、教職員間の迅速で綿密な連携、生徒に対する細やかな観察と愛情あふれる指導などにより、生徒たちは落ち着いて勉学や部活動に励み、大きな成果を上げている。今後は、より高い目標に向けて指導の充実を図っていくことを望みたい。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 各教職員が自信を持って授業に臨んでおり、質の高い授業が行われている。生徒の授業態度も良く、集中して取り組んでいる。これは教科ごとに生徒の授業評価を実施して授業改革を行っている成果のあらわれだと考えられる。
- ② 進学指導では、長年にわたって蓄積された学校独自の指導資料を作成し、それをもとに自信を持って指導にあたっている。必要な生徒には教職員から声をかけ、生徒の希望を引き出しながら不安を解消し、より高い目標に向けて自信を持たせるようにしている。
- ③ 生徒は落ち着いて生活しており、問題行動などの発生もきわめて少ない。教職員間の連携がよくとれているために生徒の小さな変化に早く気づくことができ、問題に対する対応を迅速かつ丁寧に行うことができている。
- ④ 健康についての自己マネジメント力向上を目指し、保健室が中心となって個別の指導や相談活動が綿密に行われている。また、生活習慣アンケートを実施し、問題分析とその対応が検討され、結果や対応策などの必要な情報は、保健便り・広報誌などにタイムリーに掲載されて生徒への指導に役立てられている。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 自己評価表の中長期目標や重点目標は教職員に共通理解が図られているとは言い難いので、「しのめプロジェクト」の基本理念を再度確認し、学校長の考え方を明確に示していくことが必要である。
- ② 教職員の研修について、学校課題が何であり改善すべき点がどこにあるのかを明確にしたうえで、学校として統一したテーマを持ち、組織的に授業改革の研究を進めていくことが必要である。
- ③ 図書館の積極的な利用や読書活動の推進は十分とはいえないので、学校教育全体に位置付けられた取組が必要である。
- ④ 学校関係者評価委員は年齢がほぼ同じ方ばかりであり、もっと若い年代の方に委嘱してもよいと考える。また、理数科について評価し意見を述べることのできる委員の選任が必要である。
- ⑤ 学校のホームページについては、その有効性を再確認し、根本的に作り直す必要がある。運用が一部の教職員に任せられているので、負担軽減を図る必要もある。
- ⑥ 学校近隣の住民との連携を密にし、幅広く要望や意見を聞いて対応するとともに、学校の情報を公開して理解と協力を得る必要がある。

平成 26 年度 智頭農林高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

智頭農林高校は、豊かな自然に恵まれた環境の中で、これからの時代が求めるニーズに即応した農業学科 3 科 6 コースを設置する専門高校である。

学校の教育目標は、「一人ひとりの生徒を大切に」を教育の根幹におき、勤労と責任を重んじ心身とも健康に地域産業及び社会の発展に貢献できる人材を育てることにある。

そしてその中長期ビジョンのもと、本年度は、(1) 学習指導の充実、(2) 生徒指導の充実、(3) 生徒支援の充実、(4) 地域連携の充実、を重点目標として掲げ、それぞれ具体的方策に落とし込み、学校長を中心として、全教職員がコミュニケーションを図り教育活動に組織的に取り組み多くの成果をあげている。

学校長の強いリーダーシップの根底に生徒、教師及び地域へのゆるぎない愛情が感じられる。教職員は相互の信頼のもとに学校課題を共有し合いながら重点目標への取組をしていることが感じられ、それは即生徒にも反映されるものである。

智頭農林高校の生徒として「自信」につながる取組がなされている。それが「覇気」「積極性」を生んでいる。具体的には、観光甲子園での優勝、体育系課外活動(部活)での全国大会での活躍、ボランティア活動での表彰、食品の商品化などがある。今後は智頭町とより一層連携して学校でする中で、学校のさらなる特色づくりの施策を検討して頂きたい。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 「学び合い」のある授業を実施し、生徒の習熟度に応じた学び直しによる基礎学力の向上を図り、また ICT を活用し学習内容により興味を持たせるなど、多くの教職員が授業の工夫に取り組んでおり、より一層充実していただきたい。
- ② 間伐材を活用したバス停留所の製作、板井原資料館を活用した地域交流、ちのりんショップ、どうだんまつり、農林祭、桜土手の清掃活動など多くの行事に地域と連携して取り組んでおり、地域あつての学校、学校あつての地域ということが具体的によく理解できた。
- ③ 特別支援教育の研究指定校の成果を土台に、指定期間終了後も個別の支援計画や技術のノウハウを継続研究し、その研究成果を情報発信していただきたい。
- ④ 進路指導計画が 3 年間にわたって構築され、キャリア教育が充実していることが進学・就職率の高さに反映している。学校長自ら個別面接を行い、早い段階より生徒の希望、現状を把握し、その情報を全教職員が共有するとともに、インターンシップを積極的に活用して早期の進路実現を支援している。
- ⑤ 観光甲子園での見事な成果は、日常的に発信される学校便りやホームページなどの成果を初めとする学校教育の集大成であると思われる。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 毎年定年割れの状況が続いている。智頭農林高校のもっている特色、長所、強みに磨きをかけるとともに、中学生の体験入学の工夫、インターネット活用等による情報発信をより一層強化して応募者数の増加につなげていただくようお願いしたい。
- ② 朝読書は読書の習慣化を目的ととらえ、卒業後の社会で役立つ課題解決力の育成に力を入れるため、タブレットの活用と併行して情報・図書資料を使った調べ学習をさらに活性化させていただきたい。
- ③ 部活動に関しては、さまざまな要因があろうと思われるが、教育活動の重要な位置を占めるので、より一層の工夫をもって活性化に取り組んでいただきたい。
- ④ 教職員におかれては、生徒指導について、カード指導導入など大変な熱意をもって取り組んでおられることは充分理解できるものの、中途退学や学校生活が安定しない生徒もおり、個々の生徒に応じた適切な指導を望む。
- ⑤ 進路指導室及び図書室の位置は利便性が良いとは言えず、改善していただきたい。また、進路指導室に保存されている資料の内容や閲覧の利便性につき一考をお願いしたい。

平成 26 年度 倉吉西高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

創立100周年を迎えた歴史と伝統ある倉吉西高校は、「問題発見及び解決能力に優れた人材を育成し、よりよい社会づくりに貢献する」学校づくりを実践している。学ぶことの本質追求や学んだことを生徒自身の生き方・生活に引き付ける取り組みを継続して行っていることは、評価に値する。

特に、「チャレンジグループ活動」や全国レベルの部活動、教職員一丸となった進路指導（キャリア教育）は、同校の大きな特徴である。その背景には、教職員が同じ方向性（ベクトル）を有して実践に取り組むよう、教職員個人の目標設定等において、管理職が丁寧な支援を行っている。また、生徒のさまざまな活躍をPR（校内に新聞記事を掲示する等）するなどして、高い意欲を持って教育・学習活動に取り組めるよう、その環境・条件整備が行われている。

教職員が孤軍奮闘するのではなく、チームとして組織的に職務に従事しているその様相からは、生徒のこれまで以上の学習成果が見込まれるものと、大きな期待が持てる。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 校務分掌の「学習企画グループ」が中心となって、生徒が授業で学んだ内容を自分自身の生き方や生活に引きつけて考えるレベルに到達するように授業研究会を通して、生徒が主体となる授業を展開している。
- ② 「チャレンジグループ活動」をコアとした特色ある教育活動を展開している。同活動は、生徒の卒業後の進路選択にまで影響が及ぼされるほど、生徒にとって、知的探究心を養い、個々の進路決定の指針となっている。
- ③ 全国レベルの部活動のさらなる活性化をしていただきたい。
- ④ ステージ3（いわゆる第3学年）、あるいは、校務分掌の「キャリア支援グループ」だけの教職員が進路指導に携わるのではなく、全校レベルの進路指導體制を敷いている。生徒一人につき、サポート/チューターの教職員を貼り付けている仕組みは、生徒にとって心強い。
- ⑤ 学校周辺の清掃活動・あいさつ運動（朝・登校時）をはじめとする「良き生活習慣の確立」の指導を行っている。このことは年度の重点目標に組み込まれており、継続的に実践している。
- ⑥ 校務分掌のいわゆる「部」にあたる「グループ」の機能的・機動的な運営を行っている。学級減、すなわち、教職員減を見据えた校内内部組織の再編による活性化になっている。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 生徒自身の生き方や生活に引きつけて学ぶことのできる授業実践や進路指導をさらに充実させる必要がある。生徒が希望する国公立大学の一般入試結果は伸び悩んでいる。AOや推薦入試を利用した入試結果も含め、当校の生徒の資質・能力、教職員の力量であれば、進路の決定にさらなる期待は持てる。
- ② 授業アンケートの構成・実施方法を見直す必要がある。アンケート項目の見直しや実施時期、また、教職員へのフィードバックの方法を再検討する必要がある。
- ③ 教職員の超過勤務状況は教職員間でその状況に違いが大きく、改善する必要がある。
- ④ ③ともかかわるが、部活動の専任顧問体制を構築する必要がある。具体的には一部教職員の複数顧問制を見直す必要がある。
- ⑤ 分掌組織と学校教育目標との関連性を意識した組織運営体制を構築する必要がある。
- ⑥ 教職員研修・校内授業研究との関連性を意識し、教職員個人の学びでもそれが他の教職員にも還元できるような仕組みを構築する必要がある。
- ⑦ 学校防災計画や危機管理マニュアル等を作成するとともに教職員や生徒の危機管理意識の日常化を図る取組を行う必要がある。
- ⑧ 地元中学校等をはじめとする地域社会との連携事業の見直し・実施を図る必要がある。

平成 26 年度 倉吉総合産業高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

有為な人材を育てるという教育目標が学校全体で共有され、その目標に向けて一体となった教育が実践されているといえる。その背景には、学校長等管理職の意図と教職員の実践が齟齬なく整合する経営、組織の分掌と責任の明確化、教職員間の信頼関係とコミュニケーション等があり、加えて教職員の生徒に対する愛情が見受けられる。その結果として、生徒は3年の間に必要な力量をつけ、就職・進学へとステップを進めている。

総合的に見て、当該校は非常によい状態にあり、かつそのよい状態を継続的に維持する仕組みが整備されているといえる。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 遅刻削減の取組に象徴される生徒の基本的態度の指導は、優れている。その手法として、形を重視し習慣付けることを徹底しているが、そのことが効果を上げている。
- ② 進路指導においては、本人の適性を見極め、早い段階から時間をかけて指導をしている。そのために進路指導部と担任が中心となり、更に全教職員が関与し、学校をあげて取り組む体制ができている。結果、就職率が高いというだけでなく、卒業後3年間の離職率が全国平均に比べて極めて低いという成果を得ている。
- ③ 生徒のモチベーションを高めるために、彼らの目標を、学校内考査及び専門資格の取得という身近でわかりやすい形で提示している。その結果、生徒は目標に向かって努力し、目標達成によって満足感と自己肯定感を得ている。
- ④ 会社経営者、先輩（進学者と就職者）、大手進学塾講師等の外部講師の活用、またインターンシップの体験など、さまざまな手段によって生徒に勤労観や職業観を植え付けている。その結果、生徒は主体的に進路選択する能力・態度を獲得している。
- ⑤ 「くらそうや」に代表される課題研究は、特色があり、かつその教育効果が大きい。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 手話の取組は不十分であるので、早急に年間計画を立て、実践していただきたい。
- ② 公開授業・研究授業は、一通り実施されているが、より強力な取組を期待する。例えば、学科、教科を超えて授業研究することによって、指導法の工夫、改善、生徒再発見へつながる可能性を探求していただきたい。
- ③ 専門職に関するより高いレベルや応用分野への挑戦を期待する。例えば、マーケティングリサーチ、地域商品開発、国際交流などを通じて、幅広く学ぶことができれば、専門分野以外でも適応できる発想力豊かな人材育成につながるであろう。
- ④ 教職員は、授業、部活動、生活指導、地域対応等、さまざまな業務を抱え、多忙感が否めない。その結果、時間外勤務が定常化する職員も多い。この問題に対する努力のあとがうかがえるが、今後一層の改善を望む。

平成 26 年度 境高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

境高校では、校訓として『質実剛健』・『文武両道』が謳われ、この校訓に基づき『21世紀に生きる社会人として、生きる力と豊かな人間性を育成する。』との教育方針が示されている。これを受けて、3つの重点目標が定められており、それぞれの重点目標に対して3項目の数値目標が掲げられている。学校のあらゆるプログラムとメニューが校訓を反映し、目標とした数値と比較するシステムとなって機能している。さらには、保護者や地域、境港市、市内中学校の声をアンケート等により吸い上げ、日々の教育活動にフィードバックし、学校ビジョンに反映しているなど、日々の学校教育が有機的に機能している様を実感した。

これは、学校長が掲げた明確なビジョンと、それを裏付けるために発せられた強いメッセージ、そして、それを共通理解している教職員たちの協同作業の賜物である。生徒たちは、いきいきと学校生活を楽しみ、授業や部活動、奉仕活動に、その若いエネルギーを存分に発揮しているように私たちの目に映った。このような環境で学ぶ生徒たちは幸せである。そして、ここから巣立っていく者たちは、生きる力と豊かな人間性を備えて21世紀を力強く生きていくだろう。

各項目についての評価はそれぞれの評価シートのとおりである。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 『質実剛健』・『文武両道』の校訓があらゆるメニューに反映されている。これにより、多様な教育課程とクラス編成が可能となっている。
- ② 画一的でなく、一律でもない教育環境整備がみられ、既存の施設やインフラを効果的に活用するためのアイデアがある。
- ③ 図書館や保健室等では、生徒一人ひとりを大切に考える配慮されたメニューを提供している。
- ④ 全ての教職員が「見てすぐ注意・指導」を実践し、より高い規範意識が確立されている。
- ⑤ 英語の多読に取り組んでおり、その成果が出始めている。
- ⑥ 教職員が一体となって進路指導を行っており、体系化されたキャリア教育に取り組んでいる。
- ⑦ 授業アンケート結果では、授業に対する生徒の満足度は高いが、教職員はその結果に満足せず、問題点の検証を行う姿勢は評価したい。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 学校の中長期目標（中長期ビジョン）に対する理解が、一部教職員において共通認識に至っていない懸念が否定できない。学校長によるメッセージの繰り返し発信と、日常業務との関連付けにより、全教職員による共通認識を図っていただきたい。
- ② 部活動における顧問の複数担当に、無理が生じているのではないかと懸念が見受けられる。外部指導者の活用もなされているが、余裕のある人的配置も一考の余地がある。
- ③ 特別支援教育について、中学校も含めた関係機関との連携を進めているところであるが、今後の進展に期待する。
- ④ 個人情報取扱要領の周知・徹底、不祥事防止等や法令遵守の取組について、活動内容が不十分な点が見られたため、具体的な改善が行われることが求められる。
- ⑤ 学校のホームページでは、さまざまな情報が提供されているが、運用体制やルールの早急な整備が必要である。

平成 26 年度 日野高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

学校長は、総合学科の特性を生かして、地域に必要とされる学校となるよう、リーダーシップを発揮して学校を運営している。具体的には、中長期目標として、生徒一人ひとりを大切に育てること、多彩な行事への参加を通して地域に貢献する人材を育成すること、その結果として小さくてもキラリと光り輝く学校をつくること、を掲げ、管理職の指導の下、全教職員が協力して努力している。

通学圏が広域にわたること、また、必ずしも第1志望校への進学ではなかった生徒も在籍する中で、上記の目標の実現に向けて真摯に努力を続けている様子が見えてきた。在籍する生徒の実情を踏まえて、授業のユニバーサルデザイン化や、特別支援教育、生徒指導の体制など、教育体制を充実させ、良質の進路保障に結実させている点は高く評価することができる。高大連携や地域との交流も盛んで、生徒のキャリア意識の向上やコミュニケーション能力の育成に大いに役立っている。クラブ活動においては、射撃部と郷土芸能部の活躍が目覚ましく、今後、学校の特色づくりにつながることを期待される。

学校の設備が根雨と黒坂に分かれて存在しており、管理、維持、活用の面で課題が見られる。地域貢献の課題とも併せ、「日野高等学校魅力向上コーディネーター」との連携が期待される。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 授業のユニバーサルデザイン化を研究し、効果をあげつつある点は評価できる。
- ② 少人数クラスの授業やきめ細かい課外講習など、生徒の個性に応じた教育が実践できている。
- ③ 学校独自の多彩な事業とキャリア教育とが連携し、進路決定率100%を実現している点は大きいと評価したい。
- ④ 射撃部と郷土芸能部の活躍が目覚ましく、今後の学校の特色づくりに生かしていただきたい。
- ⑤ 中学生一日体験、ちびっ子農業体験、鏡陵大学、福祉そば打ち、日野高ショップなど、地域に密着した多彩な取り組みで、異世代との交流を進めている点は評価できる。
- ⑥ 特別支援教育や生徒指導の体制が充実している。生徒支援ネットワーク事業の西部地区主幹校として研修を企画し、全教職員が統一した基準で指導にあたっている点は特筆すべきである。
- ⑦ 学校関係者評価委員会による評価・提言が次年度の自己評価計画に反映されており、システムとして適切に機能している。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 在籍する生徒数に比して部活動数が多く、部員が分散してしまう傾向が見受けられるので、生徒のニーズを見極めつつ、部活動の精選が必要である。
- ② グローバル人材の育成を図る取組、および手話に関する取組がやや少ない。学校や生徒の実情を踏まえつつ、事業計画に組み入れていくことを望む。
- ③ 社会人としての意識を育てる活動は行っているが、就職後の定着状況が今一つである、という自己評価であるので、今後有効な対策を講じていただきたい。
- ④ 組織的な授業改革について、授業公開や研究授業の実績が少ないので、今後はより活発な活動を期待したい。校内・校外研修について、今後は年間計画を作成して学校課題の解決に役立てていただきたい。
- ⑤ 生徒による授業評価アンケートや、保護者に対する学校アンケートの分析を行って公表している点は評価できるが、もう一步踏み込んだ分析や回収率の向上など、さらなる改善をお願いしたい。
- ⑥ 校舎が2か所にあることから、生徒の移動など効率面や安全面で課題がある。教育委員会と連携し、施設・設備の改善が望まれる。
- ⑦ P T A活動や行事への保護者の参加が少ないことが課題である。学校の置かれた実情としてやむを得ない部分もあり、学校としても大いに努力しているところではあるが、今後も不断の努力で参加率の向上に努めていただきたい。

平成 26 年度 県立鳥取養護学校 第三者評価 評価書

【講評】

目指す学校像として、『人との関わりを深め、自分らしさを発揮しながら、生きる意欲や自己肯定感を育む学校』を掲げ、学校長のリーダーシップのもと、病弱教育及び肢体不自由教育の充実を目指した教育実践が進められてきている。

児童生徒の障がいが重度・重複化、多様化している状況の中、家庭や関係機関と連携した児童生徒の的確な実態把握、「授業力」や「対応力」の向上を目指した研修の工夫を行い、教職員の専門性向上及び校内体制の充実に努めている。また、地域の学校等への相談活動や助言にも努めており、病弱・肢体不自由教育について、センター的機能を発揮している。

今後も教職員の専門性や指導力向上につながる研修や教育実践の充実を期待する。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 学校経営の重点目標の達成を目指し、児童生徒一人ひとりの実態に応じた指導・支援の充実を図るため、校務分掌の改編や組織運営の工夫、学部間の積極的な連携に努めている。特に、管理職による「対応力研修」や自立活動部による「お役立ち勉強会」等は全教職員の専門性向上を目指した取組となっており、教職員が意欲的に教育活動に取り組む姿が見られ、評価できる。貴校の特別支援教育の充実はもちろん、全教職員の専門性向上がセンター的機能発揮の充実につながることを期待している。
- ② 児童生徒の実態に応じて取り組まれている教育相談週間の実施は、児童生徒の自己肯定感を育むことにつながってきており、評価できる取組である。また、個別の教育支援計画を活用し、保護者や関係機関等との連携による支援会議の充実に努め、教職員全体の諸課題に対する未然防止の意識が高まってきていることが評価できる。
- ③ 創立40周年記念行事をはじめとする学校公開やホームページによる情報公開が積極的に行われ、学校・家庭等の連携が強化されている。保護者や地域等の要望や意見に対して、丁寧な話し合い等を通して解決している点は評価できる。今後、保護者や地域への啓発活動を積極的に行い、地域と良好な関係づくりに努め、地域に貢献する学校運営を期待する。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 児童生徒一人ひとりの実態や障がいの状況が、重度・重複化、多様化している現状があり、的確な実態把握や指導・支援の充実や一貫した支援について追求し続けることは重要である。学部間や障がい種別による連携をさらに強化し、少人数における授業の質の向上や教室環境の整備、教育課程編成の工夫・改善後の効果の検証を行い、さらなる向上に努めていただきたい。
- ② 一貫した支援や将来の自立と社会参加に向け、高等部における進路指導や職場体験等の充実が図られてきているが、学部間が連携したキャリア教育の推進が求められる。個別の教育支援計画も活用しながら、福祉・労働等の関係者・機関との連携強化を進め、キャリア教育の充実を目指していただきたい。
- ③ 緊急時における児童生徒の安全・安心を確保するため、施設・設備面において、早急な改善が求められる状況にある。教育委員会との連携や情報共有の必要性が高く、積極的な改善に向けた強化を図っていただきたい。

平成 26 年度 皆生養護学校 第三者評価 評価書

【講評】

「18歳で自立できる人を育てる」という中長期ビジョン達成に向けて、幼児児童生徒の現在の実態を理解し、一人ひとりに応じた適切な教育内容に取り組もうとする学校の意欲を感じる。特に学部を超えた共通理解や協働のためのシステムが工夫されており、全教職員が教育の充実に向けて力を発揮できていると感じた。

授業改善に向け、幼児児童生徒の実態把握と発達に応じた指導法等について、動画を活用して指導者間の共通理解を図る、教材・教具を整備して幼児児童生徒の様々な実態や学習内容に対応できるようにするなど、意欲的な取組がなされている。また、学校図書館の充実や社会人講師の導入など、豊かな学びを広げるための工夫も積極的かつ、効果的に実施されていると感じた。日々の学びの様子をホームページにより毎日積極的に情報発信していることも高く評価できる。

今年度より設置された高等部病弱部門においても、生徒が学習や行事に参加している姿から高等部の取組の成果が見られる。今後は、病弱教育の専門性をさらに向上させ、引き続き全ての幼児児童生徒がいきいきと学ぶことを期待したい。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 動画による授業や評価の共有化と、発達や障がい特性に応じた教材・教具の工夫がなされている。一人ひとりの実態把握について学部を超えて取り組む意識が見られており、今後の授業改善にも生かされていくことを期待したい。
- ② ヒヤリハットや幼児児童生徒の情報共有を行うためのシステムができており、防災の計画や訓練も実態や状況を考慮して見直しが行われている。幼児児童生徒が安全に生活するための日々の努力を今後も継続していくことを期待したい。
- ③ 校内の自己評価に全教職員が携われるシステムが構築され、評価を分析的に捉えて次年度に生かしている。行事後のアンケートや保護者の意見、学校関係者評価等も積極的に目標に反映させており、今後も継続した取組を期待したい。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 病弱教育に関して全校体制で教職員の専門性向上を目指し、生徒が自己実現を図り安心して学校生活を過ごすことができるように研修や共通理解を推進し、学校間の連携にも努めていただきたい。
- ② 地域との交流や学校間の交流及び共同学習について、幼児児童生徒の短期的・長期的変容を捉えながら、方法や内容について実施効果を検証し、更に充実した内容実施に努めていただきたい。
- ③ 学校便り等、保護者や関係者に学校の取組を伝える発行物については、学校教育目標に関する取組や学校の中長期ビジョンに関する内容、進路指導やキャリア教育に関する幼小小学部からの系統的な取組など、内容の充実に努めていただきたい。